コメントＢ：成田弘美（中学校の立場から）

インターナショナルスクールでの日本語の授業

成田　西町インターナショナルスクールの成田でございます。私は中学校の立場からコメントして下さいということでお願いされているわけなのですが、私自身はこちらのインターナショナルスクールに勤務する以前に公立の中学校に勤務しておりました。現在の学校へ移って３年と少しになります。ということで、公立の中学校での国語教育の実際とインターナショナルスクールでの国語教育、日本語教育の実際とを比較するという立場から意見を申し上げたいと思います。

私が担当しているのは、日本語を第一言語とする子どもたちです。日本語のクラスは、第一言語としている生徒のクラスと第二言語としている生徒のクラスと大きく２つに分けられています。そのうちの第一言語として日本語を学習している子どもたちは基本的には学年相当の文部省検定教科書を使用して授業を行うという形態をとっています。時間的には一日 45 分のクラスを週に 5 コマ、10 年間に渡って受けるという形になります。そうしますと、ある年度に卒業した私の担当したクラスの内訳はどうなっていたかと申しますと、幼稚園から 9 年生までずっと在籍した子どもたちは合計６名で、その子どもたちの言語環境が家庭ではどうなっていたか、両親の使用言語などで分類してみると、表１にあるような分布を示すことになります。

指導の難しいケース

この中で特に指導が難しいと感じたのは、10 年間在籍した子どもたちで両親の母語が日本語であるというケース、それから３、４年生で転入してきて両親ともに日本語以外を話すという生徒、この場合は実質的には日本語が第一言語ではありませんが、そういった生徒も混在していました。それから、７～９年生で転入してきた子どもたち２名、合計５名なのですが、この子どもたちへの日本語の指導は非常にやりにくいなと感じました。たぶん、これは教科学習における使用言語のバランスの問題や、母語が壊れていく問題、帰国子女のようにそれまで日本語学習のために歩んできた学習の筋道の多様性など多くの問題をはらんでいると思います。また、第二言語として日本語を学習するという意味合いを持つ生徒を抱えながら、国語の教科書を使用していることなどもその是非について十分に検討してみる余地があると思います。実際に、国語の教科書を使ってこういったタイプのクラスで授業をしていて問題と感じる点が資料１に挙げてありますが、この部分が今日発表していただいた部分と非常に関連が深いな、と感じています。国語の教科書を使っての授業しか、教科学習としての日本語を勉強していないわけですから、私どもの学校での実践は、もし、他教科からのサポートがなかったとしたら、国語の力がどの程度身につくものなのだろうか、ということを示す一つのサンプルになっているのではないかと思います。もちろん、３週間のサマースクールで日本語を集中的に学習させたり、他教科の授業の中にも日本語を取り入れることによって、日本語を第二言語として学習する子どもたちとと

もに日本語に接する機会を増やすなど、不足を補うための様々な工夫をしてはおりますが、それでも明らかに、公立学校で見てきた子どもたちの場合と比べてインターナショナルスクールの子どもたちの国語力には、これだとはっきり言い難いところがありますし、微妙に違っているなと感じるところがあるのは確かです。その微妙な何かを明らかにするためには、今日の御発表の中で示されていたようなこと、例えば、算数科で「～ならば」とか「だから」ということばを使った議論が多く展開されているというような事実がもっともっと研究されていくべきだろうと感じます。そういった表現を使用する機会が、算数科の中で多く提供され、鍛えられているのだということになると、国語の教科書をベースに授業を行っている私のような立場のものからすれば、限られた時間の中で何をすべきなのかが見えてくるような気がします。また、これからの国語教育を他教科へ依存した形で良しとしてしまうことにも少し疑問を感じます。他教科の教師が国語的な問題をどの程度、的確に意識できるかということにも関わってくると思います。

他教科と日本語教育の合科的な指導

　それから、教科間の関連の問題ですけれども、他教科と日本語指導の合科的な指導を私どもの学校でも今、試み始めています。もしできれば、非常に素晴らしいプログラムだな、とは思うのですが、合科的な指導は半面、教師にとっては、２つないし３つ以上のことをきちんと踏まえた上でカリキュラムを組まなければならないという大きな問題を背負っていまして、思い付き的にこの部分とこの部分が日本語指導と関連付けられるからやってしまえというアイデアの羅列のような授業では一年間、もしくは 10 年間を通してのカリキュラムとしては不適切で、結局のところ日本語も教科の指導も不十分な形で終わってしまうのではないかという危険性もはらんでいると感じています。

　また、低学年の比較的単純な内容での合科的指導は非常にやりやすいのですが、内容が複雑になればなるほど、難しくなってくるのではないかという気もします。こういった問題を解決していくためにも、他教科での日本語指導が実質的にどう盛り込まれているのかという点を、さらに深めていくべきだと思います。そのような研究の成果は私どもの実践にも非常に役立ちます。

高木　　どうもありがとうございました。山田さんも成田さんの御発表も国語科の中だけではなくて、その周りを見回していくことの必要性をおっしゃっていたように思います。次は高校の先生の立場から秋吉さんにお願いしたいと思いますが、やはり、同じようなタイトルだと理解しますが、よろしくお願いいたします。

表１　Ｆクラス生徒の構成

在籍年数 家庭での言語環境	K～９	１～２で転入	３～４で転入	５～６で転入	７～９で転入
両親ともに日本語	２		２		２
片方が日本語	４		１		
両親ともに日本語以外			１		

資料１　国語の教科書を使った日本語クラスで日頃感じる点

＊　国語の教科書を中心に捉えた授業によって、ある程度の日本語力は身につけることができるのではないか。しかし、Ｆクラスに在籍していても、実質は日本語を第二言語としている生徒もおり、そういったタイプの生徒にとっても国語の教科書が有効であるかは疑問を感じることがある。Ｓクラスの上級クラスとしてＦクラスを位置づけることが可能かどうかということは、校内でも頻繁に問題とされる点である。

＊　他教科からのサポートのない状況下での国語教育はよりその効果の具体性を求められる。

＊　中学部以上の学年では、特に漢字学習は大きな負担である。

＊　少なくとも社会科との連携は常に意識している。

＊　他教科の授業での日本語、国語指導の実態が研究されることによって、本校の生徒たちにどのような学習の機会が不足しているのかが明らかになっていくのではないかと思う。